**聖霊降臨節第11主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2024年7月28日**

**「主イエスを信じなさい」**

**詩編63編7～9節**

**63:7 床に就くときにも御名を唱え／あなたへの祈りを口ずさんで夜を過ごします。**

**63:8 あなたは必ずわたしを助けてくださいます。あなたの翼の陰でわたしは喜び歌います。**

**63:9 わたしの魂はあなたに付き従い／あなたは右の御手でわたしを支えてくださいます。**

**使徒言行録16章16～40節**

**16:16 わたしたちは、祈りの場所に行く途中、占いの霊に取りつかれている女奴隷に出会った。この女は、占いをして主人たちに多くの利益を得させていた。**

**16:17 彼女は、パウロやわたしたちの後ろについて来てこう叫ぶのであった。「この人たちは、いと高き神の僕で、皆さんに救いの道を宣べ伝えているのです。」**

**16:18 彼女がこんなことを幾日も繰り返すので、パウロはたまりかねて振り向き、その霊に言った。「イエス・キリストの名によって命じる。この女から出て行け。」すると即座に、霊が彼女から出て行った。**

**16:19 ところが、この女の主人たちは、金もうけの望みがなくなってしまったことを知り、パウロとシラスを捕らえ、役人に引き渡すために広場へ引き立てて行った。**

**16:20 そして、二人を高官たちに引き渡してこう言った。「この者たちはユダヤ人で、わたしたちの町を混乱させております。**

**16:21 ローマ帝国の市民であるわたしたちが受け入れることも、実行することも許されない風習を宣伝しております。」**

**16:22 群衆も一緒になって二人を責め立てたので、高官たちは二人の衣服をはぎ取り、「鞭で打て」と命じた。**

**16:23 そして、何度も鞭で打ってから二人を牢に投げ込み、看守に厳重に見張るように命じた。**

**16:24 この命令を受けた看守は、二人をいちばん奥の牢に入れて、足には木の足枷をはめておいた。**

**16:25 真夜中ごろ、パウロとシラスが賛美の歌をうたって神に祈っていると、ほかの囚人たちはこれに聞き入っていた。**

**16:26 突然、大地震が起こり、牢の土台が揺れ動いた。たちまち牢の戸がみな開き、すべての囚人の鎖も外れてしまった。**

**16:27 目を覚ました看守は、牢の戸が開いているのを見て、囚人たちが逃げてしまったと思い込み、剣を抜いて自殺しようとした。**

**16:28 パウロは大声で叫んだ。「自害してはいけない。わたしたちは皆ここにいる。」**

**16:29 看守は、明かりを持って来させて牢の中に飛び込み、パウロとシラスの前に震えながらひれ伏し、**

**16:30 二人を外へ連れ出して言った。「先生方、救われるためにはどうすべきでしょうか。」**

**16:31 二人は言った。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます。」**

**16:32 そして、看守とその家の人たち全部に主の言葉を語った。**

**16:33 まだ真夜中であったが、看守は二人を連れて行って打ち傷を洗ってやり、自分も家族の者も皆すぐに洗礼を受けた。**

**16:34 この後、二人を自分の家に案内して食事を出し、神を信じる者になったことを家族ともども喜んだ。**

**16:35 朝になると、高官たちは下役たちを差し向けて、「あの者どもを釈放せよ」と言わせた。**

**16:36 それで、看守はパウロにこの言葉を伝えた。「高官たちが、あなたがたを釈放するようにと、言ってよこしました。さあ、牢から出て、安心して行きなさい。」**

**16:37 ところが、パウロは下役たちに言った。「高官たちは、ローマ帝国の市民権を持つわたしたちを、裁判にもかけずに公衆の面前で鞭打ってから投獄したのに、今ひそかに釈放しようとするのか。いや、それはいけない。高官たちが自分でここへ来て、わたしたちを連れ出すべきだ。」**

**16:38 下役たちは、この言葉を高官たちに報告した。高官たちは、二人がローマ帝国の市民権を持つ者であると聞いて恐れ、**

**16:39 出向いて来てわびを言い、二人を牢から連れ出し、町から出て行くように頼んだ。**

**16:40 牢を出た二人は、リディアの家に行って兄弟たちに会い、彼らを励ましてから出発した。**



**使徒パウロの第二次伝道旅行はアジアから海を渡ってヨーロッパに進み、新たな段階に入りました。フィリピの町で神様はリディアという一人の女性の心を開いて下さり「聞く」者から「聴く」者としてくださいました。イエス様と出会い、イエス様こそが救い主との信仰の告白に導かれました。彼女だけでなく彼女の家族も洗礼を受けて救われたのです。**

**そして、時間の流れでは今日の箇所はパウロたちがリディアの招待を受けてリディアの家に向かう途中、リディアのおもてなしを受ける前の出来事になります。占いの霊に取りつかれている女奴隷にパウロたちは出会い、その女奴隷は「この人たちは、いと高き神の僕で、皆さんに救いの道を宣べ伝えているのです」とパウロたちにつきまとって幾日も繰り返して叫ぶのです。この女奴隷が叫んでいることは正しいことです。しかし悪霊もイエス様のことを「神の子だ！」と叫んで言いますので、恐らく彼女は悪霊に取りつかれてこのように叫んでいたと思われます。パウロは「この女から出ていけ」と命じると悪霊が彼女から出ていきました。**

**女奴隷が悪霊から解放されて自由になったと思いきや、彼女に取りついていた霊の力で金もうけをしていた主人はもうけの望みがなくなったことに腹を立て、パウロとシラスを捕らえて高官たちに引き渡します。逆恨みも甚だしいのですが、フィリピの町を混乱させているのはこいつらですと言いがかりをつけたのです。そこに群衆も加わりました。高官たちは群衆の前でパウロたちに鞭を打たせるなどして牢屋に投げ込んだのです。木の足枷をはめるだけでなくもしかしたらもっと身動きが取れない非常に不自由な状態だったのかもしれません。**

**とんでもない言いがかりをつけられて公衆の面前で辱めを受けて苦しめられ身動きの取れない体となって牢屋に入られている。非常に困難な中で「神様なぜですか」と神様に不平不満を言ってもおかしくない状況だと思います。でもそんな中でパウロたちは真夜中に大きな声で神様を讃美をし祈りをささげるのです。**

**それはまさに今日の旧約聖書の箇所である詩編63編7～9節の信仰を持ってパウロたちは神様を讃美し祈りをささげたのです。**

**「63:7 床に就くときにも御名を唱え／あなたへの祈りを口ずさんで夜を過ごします。**

**63:8 あなたは必ずわたしを助けてくださいます。あなたの翼の陰でわたしは喜び歌います。**

**63:9 わたしの魂はあなたに付き従い／あなたは右の御手でわたしを支えてくださいます。」**

**それは主が共にいて下さる、どのような状況にあっても主が共にいてくださり必要な助けを与えて下さるという主なる神様への信頼が讃美と祈りとなって表れたのです。**

**すると突然大地震が起こり、牢屋の戸がみな開きすべての囚人の鎖が外れたのです。目を覚ました看守はその様子を見て囚人たちがみな逃げたと思い込み、自ら命を絶とうとしました。それは囚人を逃がした看守は死刑になるからです。**

**その恐れにある看守にパウロは「自害していけない」と大声で叫ました。看守は牢の中に飛び込みパウロとシラスの前に震えながらひれ伏しました。「先生方、救われるためにはどうすべきでしょうか。」パウロとシラスは言います「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」との非常に有名な言葉を語るのです。「イエス様を救い主と信じることこそが真の救いである。それはあなただけでなく、あなたの家族も救いに預かるのだ」と。パウロたちは看守とその家族に神の言葉を語ります。イエス・キリストの十字架と復活の福音を語るのです。看守たちも「聴く」者とされました。神様が彼らの心を開いて下さり、イエス様の十字架を見上げて耳を傾けて、イエス様と出会ったのです。「イエスは主なり」の信仰の告白に導かれて洗礼に導かれたのです。そして自分の家に招待してパウロたちと一緒に食事を取り、パウロたちを手厚くもてなすのです。看守も看守の家族も神様によって心を開かれて隣人であるパウロたちを喜んでもてなしたのです。大きな喜びが看守の家族に満ちたのです。**

**翌朝パウロたちは釈放されます。しかし、パウロたちはローマ帝国の市民権を持つ自分たちを不当に投獄し、ひそかに釈放するのは間違ったことだと主張したのです。これは自分の名誉回復のためではなくて、フィリピのキリスト者さらには後にできる教会ためであると考えられているのです。こうして、長い夜を越えてパウロたちはリディアの家に行き、彼女たちから手厚いおもてなしを受けて、恐らく昨晩の出来事を伝えたのでしょう。どんなときにも主が共にいてくださること、主の大いなる御業によって看守も家族も救われたその恵みを語り、改めて神様の愛と恵みに思いを寄せて語り、自分たちが去っても決してイエス様から離れてはいけない、留まり続けることの大切さを語ったのでしょう。パウロたちは伝道旅行の次の目的地に導かれて向かったのです。**

**占いの霊に取りつかれた女奴隷から始まって、パウロたちの投獄、真夜中の讃美と祈り、看守とその家族の救い、釈放とリディアの家での伝道と交わりを経ての出発と非常に色々な出来事が記されている今日の箇所でありますが、神様はこの聖書箇所を通して私たちに何を語りかけようとしておられるのでしょうか。いったい何を意味するのでしょうか。**

**今日の物語が女奴隷のことから始まるのが大事なことなのです。悪霊に取りつかれて主人からお金儲けの道具にされている女奴隷は、その立場から非常に窮屈な生活を送っていました。自由など何もないお金儲けの道具としてしか見られていないのです。そして、彼女の主人は自由な立場の人間かと思いきや、お金もうけのことしか考えない、いわばお金の奴隷です。女奴隷の主人もまたその心において奴隷の状態にあると言えるのです。**

**そして、パウロたちを牢に入れた看守は自由を奪われた囚人を見張る立場です。囚人たちに対しては好き勝手なことができる自由な立場かもしれませんが、いざ地震が起きて囚人たちが逃げてしまったと思い込んだ看守は自害を謀ります。それは自分を見張り自分の上に立場にある高官たちから死刑に処されるからです。彼もまた自由な立場のようですが、上の人から支配される窮屈な生活を送らざるを得ないのです。そこには本当の自由などない非常に不自由な中で仕事をし、彼もまたある意味囚人であるということができるでしょう。また殺されるという死への恐怖は死への恐れに支配された死の奴隷ということもできるのです。つまり一見自由に見える看守もまた様々なものに支配された奴隷なのです。そして看守の上役の高官もまたさらに上の立場に支配されている奴隷と言えるのです。女奴隷、女奴隷の主人、看守、高官と全てが常に何かに支配された奴隷の状態に置かれて生活をせざるを得ないということです。**

**それは現代社会を生きる私たちもまた同じでしょう。お金に支配されるお金の奴隷、常に時間に追われ、時間に支配される時間の奴隷、人間関係においても常に相手の顔色を窺い、空気を読んで発言を気にしてその場の雰囲気を悪くしないようにしなければいけません。常に誰かに支配されている私たちも人間関係の奴隷と言えるでしょう。その心には平安はありません。心の中心に神様がいない生活は心のよりどころを探し求めて神様から離れてしまい知らず知らずのうちに罪を犯してしまうのです。それは罪の奴隷と言うことができるのです。望む善は行わず望まない悪を行なう、神様に背いてしまったアダムとエバのように。それは私たち人間の誰もが罪の奴隷にあるからなのです。**

**イエス様はそのような罪を犯してしまう私たち人間のことをこのように言われます。**

**「はっきり言っておく。罪を犯す者はだれでも罪の奴隷である。」（ヨハネ8：34）罪を犯す私たちは罪の奴隷であると。お金の奴隷、時間の奴隷、死の奴隷、どれも結局は罪に支配された罪の奴隷なのです。その罪の奴隷の代表が今日の聖書箇所の女奴隷であり、女奴隷の主人であり、看守であり、高官なのです。**

**それに対してパウロとシラスは捕らえられ牢屋に入れられる囚人という奴隷の状態でした。拘束されて身体的な自由を奪われた奴隷でした。しかし、彼らの心はその苦しい縛られた状態に置かれても喜びに満たされていたのです。彼らの心は奴隷にならず神様への讃美と祈りに満たされていました。その心は自由に解放されていました。どんな時も主が共にいてくださる、主への信頼に満たされた彼らの心は自由そのものでした。彼らは地震で牢屋の戸が開いて自由な身になれるにもかかわらず、進んで囚人のままでいたのです。あえて奴隷の身に置かれる自由を選んだのです。そして、そのために看守が救われたのです。パウロたちが逃げていたら看守はイエス様との出会いがなくて救われることがなかったでしょう。しかし、パウロたちが逃げずにあえて奴隷の身でいたからこそ、心は奴隷の状態にあった看守が救われたのです。**

**「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」パウロの語る救いは単なる苦しい状態からの解放ではなくて、罪の奴隷からの救いということです。罪の奴隷であり死の奴隷によってがんじがらめになっている看守がイエス・キリストの十字架の死によってその罪が贖われたこと、さらには復活によって死が打ち破られ永遠の命の希望を与えられる、そのイエス様の十字架と復活を信じることで罪の奴隷死の奴隷から解放されて真の自由が得られて喜びが得られるのです。**

**イエス様は先ほどと同じヨハネ福音書8：32でこのように言われます。「真理はあなたたちを自由にする」真理はイエス・キリストのことです。イエス様は私たちを本当の意味で自由にして下さるのです。私たちを罪の奴隷死の奴隷から解放して下さり、私たちをどんな状況にあっても永遠の命の希望に生かされて、神様を讃美をして祈ることができる自由な者として下さるのです。そして自由だからこそパウロたちのようにあえて囚われ人の奴隷の状態にいることも自ら進んでできるのです。**

**それはつまり私たちがイエス様の十字架と復活を信じることで、罪の奴隷からキリストの奴隷、言い換えればキリストの僕とされたということです。この世にあって私たちはキリストの僕として歩むことこそが私たちの真の自由があるのです。「真理はあなたたちを自由にする」イエス・キリストの僕としてイエス・キリストに繋がり続けて、神様と隣人を愛し仕える歩みを感謝と讃美を持って続ける歩みこそが私たちの自由であり喜びがあるのです。**